



7月2日 四十二世退董式・四十三世入山式
右 田中徳潤老師 左 吉野真常老師



指月

SHIGETSU

修禪寺・寺報
第46号

発行所 (〒410-2416)
伊豆市修善寺964
福地山 修禪寺
電話 (0558)72-0053
FAX (0558)72-9680

謹告

今般当山四十二世住職田中徳潤師は、老齢にともない本年六月末日をもってその座を伊豆市大平龍泉寺住職吉野真常師に譲り、去る七月二日、当山本堂において元住職退董式並びに新任職入山式が行われました。

四十二世は開創千二百年という寺史の大きな節目を前に着任し、広く社会に門戸を開き人々の心の拠り所として時代が求める修禪寺のあるべき姿を目指し、檀信徒会館建立、本堂大修理等の境内伽藍の整備、参籠坐禅法話等の布教活動や檀信徒参加の法要行事を数多く行い、寺檀の結びつきを強固なものとし地元地域との連携を深め、平成十九年には開創千二百年の記念大祭が無事円成し、続く時代に向けて確かな道筋を刻まれました。

今後四十二世は修禪寺東堂として変わらぬ熱意をもって仏道に精進され、つづく世代の僧侶と檀信徒のみなさまを導いてくださることをとおもいます。

四十三世となる吉野真常師は、旧大仁町のご出身で修禪寺四十一世丹羽円宗師の下で仏門に入り、加賀大乗寺、岐阜県正眼寺等で修行研鑽され、修禪寺末山の龍泉寺住職となられ修禪寺役寮職、大本山總持寺単頭職、袋井市可睡斎堂監職を歴任されました。

この度可睡斎での役寮任期満了にともない、修禪寺をよく知り、地元修善寺に馴染み深く、その人柄と身に具わる徳や法など次代を託すに相応しい吉野師とのまたと無い法縁を結実させんとした田中元住職はじめ修禪寺関係者の請願をお聞き入れくださり、住職就任のはこびと成りました。

修禪寺といたしましても吉野新住職を迎えし、先代からの門風を守りつつ新しい時代に向けて更なる精進をして参る所存です。

末筆ながら皆様には変わらぬ大慈悲心をもって、ご指導ご鞭撻をお願い申し上げる次第です。

敬具

平成二十一年八月吉日

修禪寺寺務所謹白

好縁に恵まれて

修禪寺東堂 田 中 徳 潤



修禪寺は私にとりまして、元の住職地である三島市の法華寺と称する寺の本寺でもあるところから格別な関係があり、師匠の光道和尚の時代から繁く往来していました。

その中で、私が小学生の時、得度と称する僧侶の集団に入籍するための儀式を行っていたのが、当時の修禪寺住職であった第三十八世の丘球学老師でありました。試の前日、準備として頭頂に一剃刀分だけ頭髪を残し、翌朝その頭で学校に行き皆に笑われたのを覚えていますが、午後寺に帰っ

てからの式の中でそれを剃り落していたわけですから、つまり僧侶集団に入籍するための式、それが手初めでした。しかし和尚になるにはもう一段階通らねばなりません。俗に法戦式(ほっせんしき)と申しまして、多くの修行僧を相手に問答を式で行うのですが、私は中学生の時夏休みの全てを費やし、修禪寺の山内でそれを行ずることができました。ところで、僧侶として一人前になるためには三師を経なければならぬ訳で、最初に剃髪をして下さった師を慈恩師、次に法戦式の式場を受けて下さった師を法幢師と呼び、最後に弘法の総てを授けて下さるのが本師であります。私にとりまして前二師が球学老師でありましたので全くもったいないことでございます。

戦時中、軍隊に入隊する前日まで修禪寺に居りましたし、終戦後も三島の親元に帰ったのも数日で、実際には修禪寺に戻った形となりました。

さて、それからですが、昭和二十四年の正月のことですが、戦後

憲法が改正され、それに基づく学制の中で新制中学が発足したのですが、戦争で若い教師の多くが戦死したりしてそれでなくても不足のところですから、各校長はわらじ掛けで教師を探さなければならぬ時代でした。そのころ、熱海市の、その新制の中学校の初代の校長が、その親同志、むかし同じ修行道場で暮らした道友であったことから、私が復員し修禪寺に居ることを知り教師の勧誘に二度三度来られましたが、当時修禪寺にもごく少人数ですが資格を得るための修行僧が居りましたのでその都度断りましたが、最後には代りが出来るまでと云うことで一たん三島に帰り、始業式には間に合いませんでしたが、熱海中学校へ通勤する身となりました。

ところが、何年経ても教員不足は続き、ひとりでは教科も持たねばならない時代で、ついにはのめり込むことになってしまいました。その結果、あれほどお世話になった球学老師の死に水も取れなかった後悔の念が今日でも胸中じみ出てくる有りさまです。

さて、そのような流れの中で、或る日突然修禪寺三十九世齋院絶三老師から電話が入りました。用件は何かと思ったら、後任を探せ、とのことでした。全く意中になかったものですから一瞬戸惑いましたが、修禪寺の事ですからと思

直して、後の大本山永平寺貫主丹羽廉芳禪師に相談を持ちかけたところ快くご承知を頂いたような次第でございます。

また、そうした縁のつながりから私も四十二世という好縁を結ばせて頂くことになったのですが、当初にはまったく念頭には無かった開創千二百年の事がふとしたことから浮上し、十年後に迎えることが判明したので、取りあえず、日数のかかる仏像群の修理、大きいものになりますと一体修理するのに一年程かかる訳で最後の六体目がちょうど千二百年祭に間に合う形となりました。また、将来のことも考え、参詣寺として保つていくには本堂を常に礼拝の場にしておく必要から、別に集会場が必要となり、結果檀信徒会館が建設された次第です。最後に本堂の大修理ですが、特に柱を支える土台から上の方は屋根を支える四本の太い梁まで傷み、雨水が溜るほどに朽ちているものもありましたが全て取り替え、百年の計を打ち立てた次第であります。が、そうしたことも、お檀家様や信者様の大きな御支援があればこそでありまして、改めて御礼申し上げますとともに、皆様方のお気持ちで修善寺の地を訪れる方々に通じて更に発展していくことを願ながらお祈りいたしております。

ありがとうございました。

古 佛

修禪寺住職 吉野 真常



七月二日、午前十時前、雨の中修禪寺から入山式の為、小生を迎えに来る車を龍泉寺の境内に立って待っていました。正面に見える山をボンヤリ見ていた時です。山から立ちのぼる霧が龍の姿になり天に昇っていったのです。

その後、入山式も皆様のおかげをもって無事圓成し、只今は以前から修禪寺に務められている方々に手取り足取り御教えを戴き、未熟ながら頑張っております。

修禪寺、四十二世田中御前様から伺った忘れられない御話があります。

田中御前様が中学生の時、当時の修禪寺僧堂(若い僧侶の修行す

る禅道場でありました。)で眼蔵会が修行されました。眼蔵会とは、永平寺開山道元禪師様の著『正法眼蔵』を数日間あるいは数週間かけて集中的に参究する会であります。その時の眼蔵会講師は、岸沢惟安老師。修禪寺三十七世丘宗潭老師に長く隨身され禪を極められた老古佛でありました。当時僧としてあっても、まだ中学生の御前様。その時の思い出をこう話してくださいました。

「正直、岸沢老師が話されている内容は、まったく分からなかった。分からなかったけれども、ありがたかった。本当に、本当にありがたかった。ワシの生涯で本物の提唱を聴いたのは、あの時だけだよ。」

そう言いながら御前様は、なつかしそうに岸沢老師の立ち振る舞いをまねてくれたのです。

「このように歩いて来て、弘子をこのように持つてな。」

かつてこの修禪寺には、岸沢惟安老師と肩を並べる古佛達が、切磋琢磨して修行していたのです。小生、その当時の光景を想像しただけで鳥肌が立つ思いがいたします。

縁有って、この伝統あるすばらしい禅道場にまいりました。小根

劣機の小生では、古佛方の爪の垢ほども修行ができないかもしれません。しかし一歩でも半歩でも古佛方の歩まれた道を行きたいと思っております。

何卒何卒宜しく御願ひ申し上げます。

昔日、僧あつて法眼禪師に問う
「如何なるかこれ古佛」。法眼云く、「即今也嫌疑なし」。僧また問う、「十二時中如何行履せん」。法眼云く、「歩歩踏著(歩々ふみしめよ)」と。

《道元禪師語録より》

修禪寺末山紹介(第13回目)



松岩院本堂内と
住職 熊田慧照老師

松 岩 院

●松岩院は、三島市谷田に在り、戦国時代後期に修禪寺第八世斧山宗鉏禪師開山のお寺であります。

ご住職の熊田慧照師は、平成十四年に住職拝命を受け、日々檀信徒の教化・法要等精進されております。

住職 熊田 慧照

松岩院は修善寺より離れた三島市谷田の三島警察署の裏に位置します。

寺の縁起らしきものは何も残っておりませんが、「豆州志稿」によりますと、修禪寺第八世斧山宗鉏大和尚によつて開かれたとありますが、狩野川台風以前の時代に、当院横を流れる大場川の氾濫によつて本堂を含むほとんどの伽藍が流失してしまい、奇跡的に泥の中から御本尊薬師如来様が発見されたとの記述があるのみで、草創当時の様子は今日では知る術もありません。

ところが、その話を知人宅でしていたところ、その場に偶然居られた駒澤女子大教授の安藤嘉則先生が「その和尚様なら知っているよ」と言われたのです。先生の分

厚い著書の中に載っておりまし
た。その内容によりますと：江戸
に幕府を開いた徳川家康は禅に大
変理解が深く、江戸城や駿府城で
しばしば曹洞宗や臨済宗の和尚を
集めて法戦式（佛法の問答大会）
を行っていた。そして、伊豆から
代表で大会に出席していたのが斧
山宗鋳大和尚であつた：と書かれ
て在り、その時は偶然教えていた
だいて知ることができた不思議さ
にただ、驚くばかりでございました。

松岩院の現在の本堂はおそら
く、水害後民家を移築して使用す
ることになったのだらうと推測し
ますが、八畳・六畳・四畳半だけ
のまったくもって可愛い修禪寺末
寺最小の伽藍に、体重九十キロも
ある末寺最重量の和尚が一人と云
う、とてもつつましい『庵』でござ
います。

私は、修禪寺先々代住職丹羽圓
宗老師の三番目の弟子であります。

そもそも修禪寺との縁は、今
から約二十数年前、私の兄弟子に
あたります先日修禪寺の新住職に
就任されました吉野真常老師をた
よって修禪寺に修行に来たことが
はじまりでした。

大学生の時、私は盛岡報恩寺僧
堂の関大徹老師に「あなたの書か

れた本を読みました。どうかそこ
で修行したいので入れて下さい」
と手紙を書いて入門を許可され、
学生生活をしながらの小僧生活を
始めました。真常師はその道場の
二年先輩で、その後、関老師が若
い頃修行された岐阜の正眼寺でお
世話になり、師が伊豆に帰ってい
ることを聞き、一緒に修行させて
下さいと手紙を書いて修禪寺に上
山したのであります。

ちいさな電車に乗って修善寺駅
に着き、駅前の床屋で丸坊主にし
てバスに揺られて温泉場に。お寺
に到着した時にはすでに夕暮れ、
玄関は閉まり当時はインターホン
も無くどこから入ってよいのか解
らずうろろしたことを覚えてい
ます。程なくして真常師が現れ挨拶
を済ますと住職に挨拶せよとの
事、正眼寺の老師様のようにおっ
かなかつたらどうしようどキド
キ、薄暗い所でお目にかかった御
方が丹羽圓宗老師でありました。

そのときどんな言葉を交わした
のかまったく覚えてはおりません
が、お寺のなかで交わされる伊豆
弁が東北生まれの感受性豊かな私
にはとにかく強烈で、その昔、熱
川温泉を舞台にした細うで繁盛記
で富士真奈美扮する正子に出会っ
たような「おみゃーどっから来た

ずらー」とは言われなかったと思
いますが、とても個性的な人たち
に出会ったと云う衝撃は今でも脳
裏に焼き付いているのであります。

その当時の修禪寺での生活と申
せば、本師も七十歳代で元気で威
勢が良くてよく怒っておられまし
た。私は何も知らない小僧でした
ので、本堂にお供えのバイナツプ
ルを甘くしようと坐禅堂の縁側で
陽に干しては怒られ、管理が悪く
米櫃から虫を発生させてしまい新
聞を敷いて陽に当てていると「米
が割れてしまうだらうがあー」と
怒鳴られ、そば粉を頂いたので打
ってみれば繋がらず、マツチ棒の
ような蕎麦を出せば「まったくふ
ざけた野郎だよ」と叱られ、真常
師と畑作務をやる「これが後に
肥料になるんだ！」と二人でたっ
ぷり畑に入れた落ち葉が、春にな
って耕すと埋蔵金のようにザツク
ザツクと出てくる始末で、その時
本師は地べたに座ってタバコの煙
を揺らしながら「オメエーら！過
ぎたらあ及ばざるが如しってえ知
ってるかあー！」と叱られました。
本来ならば、先生の云う意味を
理解しそれを教訓として学び取る
ところでしょうが、駄馬の私はた
だ、そのべらんめい調の巻き舌に
感心するばかりで、正にふざけた

野郎でございました。その本師が
道場に居る頃の私に「天知る 地
知る 人知る 我知る」と一文を
書いて送って下さった事がありま
す。私の世代は学校教育の他に塾
等習い事に通った世代ですので、
学ぶという事は学校も含めてど
こかに行つて教わるもの・教えて
もらうもの、という感覚がありま
した。ですから、どこかに修行に
行くもの・どこかに厳しく修行さ
せてくれるところが在ると思つて
しまつて居りました。今まで私が
受けた教育は答えを導き出す途中
は重要ではなく、その答えが正解
しているか否かが重要でした。そ
の習慣から道場で独参しておりま
すと、公案の正解を狙つて、また
その正解に近い所を探そうとする
ようになります。すると、公案が
いくつ進んだとか、何回目の参禅
で通ったとか、道を踏み外した世
界になつてしまいます。それはあ
たかも、人目を気にして優秀な良
い子を目指して頑張ろうとするよ
うなものかもしれません。

自分自身に誠実に正直に、「今、
ここ」をしつかりと参じることに
気づかせて頂いたのが本師の「天
知る 地知る 人知る 我知る」
でした。

修禪寺からまた真常師のあとを

追うように金沢の大乗寺へと上山し、それから愛媛の瑞応寺、臨済宗の圓福寺と行脚して現在に到ります。

松岩院に入寺して未だ六年。私の体に反比例した、小さくてつましい姿をした寺ではございますが、今後とも皆様には御法愛を賜わりたく何卒宜敷御願ひ申し上げます。

合掌

還暦に思う

堀切・熊坂地区役員

水口 信夫

今年は丑年、私還暦の年であります。

六十年前にこの堀切の地に生を受け、以来この地より離れる事もなく、しっかりと地に根を張り巡らせて生きております。

昨年、永年勤めた役所を定年退職し、時間で動いていた大きな体をどう動かすか考える間もなく、修禅寺の護持会地区役員を水口甫策さんより引き継ぐことになりました。

かつて、私の父・功がやっていましたが、どんな事をしていたのか内容を知ろうともしていません

た自分でしたが、いざやってみるとお寺の行事は思いのほか多く、初めて経験する事が多くあります。

二月三日の節分には年男であったので、年祝者として豆撒きを経験させて頂きました。

袴・袴を着用して本堂前で御前様を交えての記念写真。本堂内での祈禱を済ませ御前様の後に続き、本尊様・お大師様・御位牌堂に「福は内!」「鬼は外!」と声を張り上げて元気よく豆を撒きました。続けて、檀信徒の皆様・地元の皆様や観光客でいっぱい境内で豆やみかん、紅白餅などたくさん撒きました。豆撒きが終わると幼稚園児たちが矢を射て福引を楽しみました。一等から参加賞まで、御前様直筆の掛け軸からお米券など趣向を凝らした景品があり、とても良い経験をさせて頂きました。

還暦とは、陰暦で干支が六十年で元に戻るから満六十歳を還暦と呼ぶそうです。この豆撒きを機に自分の中でまた第二の人生を始めようという気持ちを起こさせてくれた気がしております。

時間に余裕があるということの自由さを満喫し、今までやらなければならぬと追われてやっていた野菜作りや米作りも、自分の性

格に合ったやり方で出来る。納得のいくやり方でやり始めている時間が気にならない毎日が、本当に充実していると感じております。

この先も、丑のように優しいまなざしを持って、ゆつくりのんびり暮らしていこうと思う今日この頃であります。

結びにあたり、修禅寺は宗門僧侶を教育する修行寺のイメージが強く敷居の高いお寺と思っておりましたが、護持会役員としてお寺の諸行事に参加して、御前様をはじめ僧侶の方々の親切な対応に感謝すると共に、菩提寺に対しての務めをしっかりと果たしていこうと思っております。

坐禅体験



○二月二十七日、中伊豆中学校で坐禅体験の時間があり当山より出し指導をさせていただきました。

生徒たちはなれない坐禅に組んだ足がとても辛そうでしたが、この時間が少しでも良い経験になれば・・・と思います。

生徒の感想文より

『僕は初めて坐禅を組みました。僕はやるまで坐禅はただ足を組むだけかと思っていました。でも坐禅は入門編でも色々と気をつけることがあると知りました。足はとても痛かったけど、久しぶりに自分と向き合うことができました。田中住職さんの話を聞いて、正しい姿勢で勉強すれば、普段より疲れなくて、頭も疲れないので、頭がさえるということを知りました。』

二年・男子

『今日は普段経験できないようなことができた、貴重な時間を過ごすことができました。坐禅を組むことは初めてで、坐禅の姿勢を保ちながら痛みを耐え、自分と向き合



うこと、本当の自分を見つけることはとても大変でした。しかし、坐禅を終えたあと気分がすがすがしくなり、体が軽くなった気がしました。坐禅は人間の生活の基本であり、前向きな気持ちにさせてくれるということがよくわかりました。これからもし、壁にぶつかって思い悩むことがあったら、坐禅をして心を落ち着かせて、再び目標に向かって進んでいきたいと思っています。』

二年・女子

盆踊りと修禅寺寄席

○八月一日夜、施食会法要後に「第五回修禅寺寄席」が檀信徒会館で催されました。今年も温泉場出身の落語家・瀧川鯉之助さんの落語に加え、紙切り芸に同じく温泉場出身の水口ちはるさんを迎え演じて頂きました。

鯉之助さんは先日、めでたく来年真打昇進が決定し、水口さんは寺門前に「紙切りの店」をオープンしました。地元期待ふたりの若手による落語と紙切り芸に会場は爆笑の渦に包まれました。

寄席に続いて行われた盆踊りでは、昨年につづき温泉場商工会の皆様による夜店「桂遊縁日」も出店し、檀信徒の方々を中心に旅館の宿泊者など大勢の参加者でにぎわいました。

御寄付

○精米 三十キロ

中里 唐澤之泰様

○梅干し たくさん

北又 野村広志様

○野菜 たくさん

堀切 水口甫策様

○野菜 たくさん

湯舟 波多野靖様

○ぞうきん 百枚

清水町 小野寺晏代様

○ぞうきん 七十枚

小坂 鈴木登美男様

○竹ぼうき 五本

ぞうきん 十二枚

桂谷 老人クラブ様

九月・年末のお寺の行事です

●九月十五日(火) 午前十一時

「範頼公墓前供養祭」

●九月十八日(金) 午後八時半

「観音講」

●九月二十三日(水) 午前十時

「秋彼岸会法要」

●十一月七・九日(土・月)

「桂谷八十八箇所巡拝」

※七日(土) 午前八時出発

第一番～第三十五番

八日(日) 午前八時出発

第三十六番～第七十一番

九日(月) 午前八時出発

第七十二番～第八十八番

満願大祈禱法要

●十二月八日(火) 午前十一時

「成道会」(じやうだうかい)

※お釈迦さまが「さとり」を開かれた日を記念する法要です

●十二月二十二日(火) 午後一時

「奥の院 星まつり」

●十二月三十一日(木) 午後十一時

「除夜の鐘」

※十二月二十五日より整理券を寺で配布します

おねがいです！

～寺山墓地について～

▼墓地はご先祖様の聖地でありま

す。

どうかお墓参り関係以外のごみを置かないで下さい。

また、焼却すべき墓参ごみは必ず焼却炉に入れて燃やして下さい。

平成21年度 修禅寺護持会・仏教婦人会役員名簿			
地 区	氏 名	備 考	
顧問・住職	吉 野 真 常	修禅寺	
顧問	最 川 治 郎	中神戸	
会長	田 口 行 央	遊覧町	
副 会 長	野 田 治 久	南町	
会 計	波多野 勤	上湯舟	
上 北 又	松 岡 啓 悟		
下 北 又	川 野 吉 人		
上 湯 舟	梅 原 正 直	幹事・庶務	
下 湯 舟	坂 口 正 明		
西 紙 谷	田 沢 豊		
東 紙 谷	平 田 昭		
上 中 里	外 川 孝 男		
下 中 里	植 田 安 男		
小 山	海老名 毅	監事	
小 坂	三 須 定 雄	幹事・庶務	
弁 天 町	河 合 弘 雄		
上 神 戸	飯 塚 清 丸		
上 中 神 戸	遠 藤 昌 輝		
下 中 神 戸	田 畑 和 男		
下 神 戸	土 屋 実	監事	
桂 町	木 村 真 宏	幹事・庶務	
遊 覧 町	土 屋 貞 夫		
本 町	原 京	幹事・庶務	
南 町	飯 田 武 生		
半 經 寺	野 田 耕 平		
下 修 善 寺	江 藤 重 光		
横 瀬	遠 藤 章 治		
駅 前	小 針 雄 一 郎		
堀切・熊坂	水 口 信 夫		
大 沢	星 谷 真 弘		
婦 人 会 長	湯 川 政 子	南町	
副 会 長	梅 原 美 代 子	中神戸	
会 計	上 杉 和 子	弁天町	